

## 序

本学の教員が国際的にも高く評価される研究を推進するという目的に沿って今年度も研究活動一覧（第22輯）が刊行の運びとなった。研究の検証システムの一環として開学以来続けられているものであり、その主旨は教員によりよく理解され、研究の活性化に十分役立っていると評価される。

平成10年には更に関係各位の御努力により富山医科薬科大学「点検・評価報告書'97」が刊行され、研究についても個人業績をも含めて公開され各方面からの高い評価が得られた。

さて、研究の活性化はこの様な検証システムにより競争的環境を生み出し、研究員のモチベーションを高める事が重要であるがやはり研究費の額及び研究員の質、量も必要な因子である。御承知の如く日本経済は現在の低迷を続けそこから派生する財政構造改革の必要性から、平成10年度の文部省一般会計は前年度比0.5%減と厳しいものであった。にも拘わらず科学研究費は5.1%増であった。本学の科学研究費の交付状況も前年度比3.3%増となっており研究活動の活性化を反映するものとして評価できる。

一方、学長裁量経費とされている教育・研究学内特別経費は平成10年度からは前年度に比べ、やや増額になり課題研究及び自由研究について合計21件約4,000万円を配分した。

この様に基盤整備の面では研究の活性化が企てられてはいるが平成10年10月26日の大学審議会答申、21世紀の大学像と今後の改革方策について——競争的環境の中で個性が輝く大学——で、教育研究システムの柔構造化が必要視されている事実を踏まえ、第三者評価の必要性を強調されている。また点検評価委員会の“研究に関する専門委員会”では研究の活性化を促す具体的事項について現在検討中であり、その結果が期待される。

学 長 高 久 晃